

## ★文化知普及協会基礎講座の案内

2021年10月14日 榎原 均

在野研究者の私が主宰した私塾的な講座は、政治・文化講座（1997～2002年）で、その記録はHP オフィス榎原に掲載されています。また単行本も何冊かあります。基礎講座に関連する書籍は『「新本論」の核心』（情況新書）ですが、今回のウェブ講座では、これまでとは違った方法論で話したいと考えるに至りました。

私は理学部出身で、在学中から安保闘争に関わり、ロクに授業に出ていません。当時の理学部は教養部では学部の学科には所属してなくて、3年生になるときに学科を選びます。ノーベル賞を取った湯川秀樹に憧れて理学部に入学したのですが、学生運動に明け暮れた2年間で、物理や化学には分属試験があり、到底受かりそうにもないので動物学科を選びました。学部でもほとんど出席しなかったので、7年間在籍の後中途退学となりました。

では学生時代に何を研究したかと言えば、理論的にはマルクス・レーニン主義であり、具体的対象としては、人間の政治的実践を体験しつつ研究してきたのです。学部時代の同級生は、動物学、霊長類研究（サル学）、生物物理学、人類学、等々の権威になっていて、たまたま教養部時代の同じクラスに利根川進がいたので、彼がノーベル賞を取ったのちに定期的にクラス会が開かれるようになり、たまに参加するようになりました。みなさん退職したころでしょうか、クラス会で懇談しているときに、自分は何をしてきたかについて報告するはめになり、その時に自分は現在の社会を人類学の対象として研究してきたのだ、といったのです。

数年前のことで、この時にはまだラトウールなど読んだこともなかったのですが、1990年前後に、1960年代の三菱重工系列の広島県三原市の工場での不当解雇に反対する闘争現場で知り合っていた栗本慎一郎の『パンツをはいた猿』等々を読んで以来、ポランニー、モース、レヴィ＝ストロースなどを読み（『親族の構造』は理解できなかったのですが）、そのあとも文化論の解明をめざして、ギアツやサーリンズなども読みました。本を読むときに指導教官もいないし学会のしきたりも知らないので、デュルケムなども読まなければならないのですが、ちらっと見て興味湧かないので未読に終わっています。

私はラトウールが主張したアクター・ネットワーク理論について、彼はその先駆者をデュルケムと論争し忘れ去られたタルドに求めています。私はマルクスこそがその先駆者だと考えていて、それを彼に伝えるべく準備中なのですが、うまく文章化できないまま現在に至っています。

また私の独創的な『資本論』解釈も、学界では無視され続けているのですが、その理由も大体わかってきました。結局私の経済学研究も無意識のうちに人類学の方法を使っていたのでしょう。ですから、伝統的な哲学や社会科学の方法に依拠した人文科学者や社会科学者には理解の彼方にあつたのでしょう。

このような自身の実践についての理解にもとづいて、おそらく最後の機会となるこの講座では、近代科学の方法を止揚した人類学の方法にもとづくという明確な意識性をもって取り組むことにします。次の五つの講義を予定しています。第一講は、11月7日午後2時よりZOOMで開催します。

## 講義の内容

### 第一講 商品の価値形態の探求

#### 商品の思考と人間の思考との差異

『資本論』冒頭の商品論で、価値形態論までは容易に理解できる。しかし価値形態論は難解で、初めて読んだ人はここで投げ出すことが多い。俗に「前歯を折る」と言われている。

貨幣論はちょっとごみごみしている感じだが、貨幣の資本への転化は解りやすく、資本の生産過程もおそらくすらすら読めるだろう。

価値形態論がむつかしい理由は、商品の思考が人間の思考とは異なった様式であり、かつ価値形態とは商品の思考そのものだから。

このようにいうと、物質が観念を持つのか、という疑問が出るだろうが、物質の関係を想定すればそこに電磁気的作用があり、それを観念的なものの働きとして理解することができる。これは人間の思考を脳細胞のニューロンの働きに解消するというような還元的発想ではなく、逆に、人間に備わっている観念という概念の拡張である。商品の場合の関係は物質相互の関係ではなく人々の社会的関係であり、この場合は物質の観念性とは別の領域にある。しかし、商品の観念的性格が明らかになれば、物質の観念的性格も解明可能になると考えている。

### 第二講 関係について考える

### 第三講 文化について

### 第四講 政治について

### 第五講 陣地戦と自治